

PICK UP MOVIE



© 2020 Puritan Films, LLC – All Rights Reserved

ボストン市庁舎

[2020 年／アメリカ／英語／1.78:1／モノラル／274 分]
監督・製作・編集・録音：フレデリック・ワイズマン

“ようこそ、市民のための市役所へ。”

巨匠フレデリック・ワイズマン最新作。

警察、消防、保健衛生、出生、結婚、死亡記録、数百種類ものサービスを提供するボストン市役所の挑戦。

アカデミー名誉賞に輝く巨匠フレデリック・ワイズマンの『集大成』『ニューヨーク公共図書館 エクス・リブリス』で知られるドキュメンタリー界の“生ける伝説”フレデリック・ワイズマンが選んだ新作の舞台は、ワイズマン生誕の地でもあるマサチューセッツ州のボストン市庁舎。カメラは飄々と市庁舎の中へ入り込み、市役所の人々とともに街のあちこちへ動き出す。そこに映し出されるのは、警察、消防、保健衛生、高齢者支援、出生、結婚、死亡記録など、数百種類ものサービスを提供する市役所の仕事の舞台裏。

今コロナ禍で問われる「市民のための市役所」とは？

[上映日程] 1/15~28 (休映：1/17、24)

[特別鑑賞料金] (一般) 2,800 円、(シニア・学生) 2,500 円
(障がい者) 2,000 円、(前売り) 2,500 円

『ボストン市庁舎』公開記念「市役所割」実施！

市役所で働く職員の皆さまに特別料金にてご覧いただけます。

「市役所割」実施決定

(※ 都道府県・区などの役所も含まれますが、教師や警察などを含む公務員割ではありません。)

* 割引適用方法：劇場窓口にて「職員証」または職員証に準ずるものを窓口でご提示ください。

* 割引詳細：当日料金 ¥2,200 (通常当日 ¥2,800 の処) にてご鑑賞いただけます。

* 窓口でのチケットご購入のみでの適用となります。オンラインチケットのご予約ではお使いいただけません。

アフタートークイベント

映画『ボストン市庁舎』から考える
「市民のための市役所」とは？

・トークイベントのみの参加はできません。

予約優先。下の
QRコードより、
座席の予約をお
願います。

[開催日] 1 月 22 日 (土)
[時 間] 上映：13 時～(上映後トーク／19 時終了予定)
[会 場] 上田映劇 別館「トラウム・ライゼ」(上田市中央 1-6-13)
[登壇者] 上田市長 土屋陽一
市政をたのしむユニット：ゆるりと◎
(吉澤まほ／やぎかなこ)



市長は、理想を掲げ、理念を語る

フレデリック・ワイズマン監督は 90 歳でこの映画を制作した。それまで 44 本のドキュメンタリーと 2 本の劇映画で、アメリカのさまざまな側面を表現してきた。今回はアメリカの縮図のような多くの民族・文化が入り混じる大都会の市役所を舞台に、アメリカの政治を考えてみようとしたという。優れた市長を擁する 6 都市に取材を申し込むと、ボストンのウォルシュ市長から返信があった。ボストンは偶然にもワイズマン監督の生誕の地。作中にはさまれる街並みのショットには、子供時代を過ごした場への懐かしさが滲み出る。

映画は全篇が行政の各部署で交わされる対話で埋め尽くされている。市役所職員同士あるいは専門家を招いて行う討議、市民との話し合い、市長が市民や職員に語りかける言葉。どれもが簡潔で的確に要点を突いていて、聞いているだけでも心地よい。しかもあつかう課題はゴミや交通渋滞などはもちろん、大麻の合法化、貧富の格差解消、銃規制、少数派に対する差別の解消と、困難が山積みだ。

なぜボストン市が、果敢に難題に立ち向かい、明快な解決策を打ち出しているのか。市当局者のさまざまな発言を聞くうちに次第に分かってくる。「行政は人々が共に幸せに暮すためあるのだ」というのが、市役所職員の共通理念なのだ。だから貧困、高齢者、看護師不足などの問題も、すべて困っている人を救う目的で議論が進む。大麻店出店者と地元住民の緊迫した話し合いは、民主主義の原点を見せてくれる。退役軍人の集いは、歴史を重視し過ちを繰り返すまいとする市長らの姿勢を際立たせる。同性婚カップルの結婚式、経営難の高校を存続させようとする話し合いなどは、まさに血が通った市政だと言える。

行政に携わる人は、理想を掲げて、心底から理念を説いてほしいと強く感じた。そういう行政を作り上げるために、私たち市民は何をすべきか。どのように行政に食い込んで自分たちの意見を反映させられるか。この作品には多くのヒントがありそうだ。

tamura shizue

田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977 年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983 年からホウシャオシエンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。